農業生態学、食糧主権、 汎アフリカ主義のためにタンザニア農民が団結する

タヌプリヤ・シン著、脇浜義明訳

People's Dispatch, ２０２２年１１月２６日

（ピープルズ・ディスパッチがタンザニアの小規模農民に彼らの尊厳と正義のための闘いについて語った。）

１１月１７～１８日、小規模農民数百人がモロゴロ市でタンザニア小規模農民グループの全国ネットワーク（MVIWATA）の第２７回年次総会を開いた。この組織は１９８６年から１９８９年にかけて IMF と世界銀行主導でタンザニア初めての構造調整プログラム（SAP）が実施された後を受けて、農民たちの自主的な活動により１９９３年に創設したものである。SAP で導入されたネオリベラル改革は社会主義で反植民地主義者のジュリウス K. ニエレレ大統領の中央計画経済と完全に決別するものであった。

１９６７年にニエレレはアルーシャ宣言をし、社会主義と自立の原則を掲げ、基幹産業の国有化と農業の集団化への道を拓いた。「農民と労働者はタンザニア経済のエンジンだと宣言され、彼らのために巨額な公的投資が行われました。農民は政府から擁護され、生産品を協同組合を通じて売っていたのです。」と MVIWATA の事務局長のセオドラ・ピアスがピープルズ・ディスパッチに語った。

しかし、SWAP 時代に経済から政府が追い出されると、事情が一変した。それに、ピアスによると、綿花、紅茶、コーヒーを栽培する集団農業組合はあったけれど、トウモロコシや小粒の穀物を栽培する農民は農業協同組合に入っていなかった。そういう事情から MVIWATA が誕生したのだった。

「農民団体が結集してタンザニア国内を回って、農民たちに一つになって、農業を国の政策に入れよ、農産物の価格を調整せよ、農業拡大事業に多様性をもたせよと要求しようと呼びかけることを決めたのです。タンザニアのすべての村を NVIWATA に入れるのが私たちの夢だった」とピアスは語った。

農民の尊厳と正義の確保

３０年前に MVIWATA を結成しなければならなかった問題は現在も存在する。それ故 MVIWATA は今や草の根の小グループから全国的組織まで含むようになった。

「８０年代後半と９０年代に農民を苦しめたシステムは現在も同じで、顔を変えただけです。だから私たちの要求も同じで、土地、市場、資金アクセスに関する改革です。３０年前と状況が異なるので、戦略もそれに合わせて更新しました」とピアス。

今年の総会にあたって組織は２０２２～２０２６年の戦略計画を用意し、６つの重点目標を定めた。第一は「農民が一つの社会階級として尊厳を保持すること」である。第二は農

業生態学[1]と食糧主権の重視。「アグリビジネス・モデルはタンザニア人民、その権利、そして地球を傷つけてきました。私たちの土地を奪い、種子を奪い、文化と尊厳を破壊しています」とピアスが言った。

「農業生態学と食糧主権は生産者と消費者の権利、環境、生物多様性を守る代替システムになります。そのシステムの中で農民は安心して生産に従事できます。食糧は単に売られるだけの商品でなく、権利であるという認識と信念を抱いて生産活動に従事できるのです。」

他方でアグリビジネスの蔓延があって、村人たちに農薬を使った持続不可能な従来型農業とアグリビジネスこそが農民の富創造の源泉だというプロパガンダが浴びせられる、とピアスは現状況を説明した。

また MVIWATA は、立ち退き、土地収奪、土地投機が増え、農民が農地から切り離される状況のなかで、土地の権利と安全保障を中心に幅広く組織化を行い、闘っている。

「毎日立ち退き、村を出て他所へ行けと通告されたというニュースが入ってきます。資本の圧力が人々を家や畑から追い出しているのです。それが『国益』のための投資、または他の公式政策の名の下で行われます。立ち退き犠牲を強いられるのはほとんど農村の農民です」とピアスは語る。「立ち退き対象になった農民が農地に残ると強く望んだ場合、投資家が指定する作物を栽培するという条件で許される場合もあります。」

年次総会決議の中に具体的な土地権利闘争、例えば「ムバラリ地区で２１０００人の農民が立ち退き脅威に直面」している問題への取り組みがあると、ピアスが語った。

総会では現存の法律を使って農地を守る方法や、残り少なくなる農地へのアクセスをめぐって小規模農民の間で生じる軋轢を調整する方法などが討議された。

MVIWATA がもう一つ重視しているのは経済的公正の実現である。「農民は極めて困難な状況の中で生産するにもかかわらず、産物の市場価格は非常に低い。次の生産へ向けて種子購入などの資金ができません。そこへ登場するのが中間業者で、農民に融資します。中間業者は収穫期になると市場の価格を無視して、元利合計の回収として、全部取ってしまうのです。」

こういう状況に備えて MVIWATA は預金や信用グループを構築して農民集団に融資し、生産物が公正な価格で販売できるように生産物を集団的に扱う仕組みをとった。農業の協同組合化と融資の促進も決議された重点目標であった。

ゲストとして「汎アフリカ主義トゥデイ」のジョニス・ゲディ＝アラソウが総会に参加していたので、ピープルズ・ディスパッチが意見を聞いた。彼は「MVIWATA のような組織は土地、金融、農業問題に関する人民の思いを表現している。タンザニアの農民がタンザニアに食を提供しているだけでなく、農民を組織することによって新植民地主義との決別を意思表示している」と語った。

---

[1] 農業生態学については、下記の記事を参照のこと。https://shizen-hatch.net/2020/06/23/agroecology-aim-or-environmental-social-and-cultural-diversity/
―編集者。

MVIWATA は１１月１８日の年次総会の前に、農地、種子、市場の３領域に焦点を合わせた「タンザニアの投資と自由市場の中の小規模農民の未来」と題するワークショップを開いた。「ワークショップではいくつかの意見が強調された。その一つは農民は個人として自立するために生産しなければならない。つまり国内市場向け生産をせよという意見です」とゲディ＝アラソウは言った。「昔は、グローバルサウスの農民の間の連帯があって。産物を自国の外で関税なしで売ることができた。現在それを復活させる動き、特にアフリカでは農民が輸出する産物に関税をかけて人民間の連帯を弱めるのをやめて連帯の輪を再生しようという動きがあります」と付け加えた。

彼は外国企業ではなく土着の種子、つまり外国企業から種子を買うのでなく作物の種の利用、及び種子バンクの発展に力をいれようという意気込みが再び生まれつつあることについて語ってくれた。総会では、小規模農民優先の農業への予算配分の増額を要求するとともに、現存の種子法を地域固有の種子を含むように改訂するよう要求することが決議された。

農民たちは立ち退きといわゆる「投資家たち」と闘い続けることを誓った。「政府は指導部ではない。人民が指導部なのだ。だから５年ごとに我々の投票で審判を受けなければならないのだ」とこの闘いの指導者の一人のヴェロニカ・ソフが宣言した。

さらに対外貿易協定、特に EU と東アフリカ共同体（EAC）の間の経済連携協定についても議論した。タンザニアは東アフリカ共同体のメンバー国である。タンザニアはまだ協定に署名していないが、総会ではそれが農民に与える影響を話し合った。

MVIWATA はジェンダー正義の問題に関しても、特に農民フェミニズムに重点を置いて運動している。女性に対する暴力を止め、農村部で女性を解放運動に立ち上がらせる運動をしている。３月の国際女性デーには MVIWATA と汎アフリカ主義トゥデイは農民フェミニズムに関するワークショップを開催、全アフリカから活動家が参加した。

また、MVIWATA は若者に働きかけ、農業生態学、自立、政治経済に関する学習会を開いた。

「一緒に建設しよう」

「タンザニアで農民を抑圧するシステムは、バングラデシュ、南アフリカ、ナミビアで農民を抑圧するシステムと同じです。私たちを抑圧する力が結合するなら、私たちも結合して反撃しなければなりません」とピアスが言った。

MVIWATA は汎アフリカ主義を原則にして、アフリカ大陸全土の運動に関わってきた。MVIWATA は「タンザニアだけでなくアフリカと世界の土地、食糧、農民問題に対して人民的視点で答えを出すので、汎アフリカ主義闘争にとって重要な一翼」である、とガーナ社会主義運動（ＳＭＧ）のマーシー・デダー・オセイはピープルズ・ディスパッチに語った。「MVIWATA は農民搾取に反対する声を集めたプラットフォームを形成しています・・・団結し、労働し、学習し、扇動して、いっしょに農民の権利のための闘いで強力な力となる

ことが必要だ」と言った。

ピアスは「私たちのスローガン『農民を守護者は農民である』は私たちの会合に招いた西アフリカの農民が作ったものです。汎アフリカ主義はMVIWATAの歴史、現在、未来に埋め込まれているのです。私たちは危機のときに団結するだけではなく、一緒に戦略を構築しなければなりません」と語った。

「汎アフリカ主義の核心は主権を取り返す闘いだ。もちろん、闘いの一つの面はアフリカ人民、ディアスポラの人々、世界の労働者の政治的・経済的自由を確保することだ。もう一つの重要な面は人民が自らの力で自らを養うようになることだ。アフリカは天然資源が豊かなところなのに、人々は最高に飢えているのだ」とゲディ＝アラソウが付言した。